

親子臨床心理面接での親の情緒的発達と 子どもの心の組成との関係

浴野 雅子¹⁾

The relationship between the emotional development of parent and
the psychic construction of child in the parent-child psychotherapy

Masako Ekino

要 旨

親自身の親子関係から組成されてきた親の情緒状態や自他の情緒への扱い方と子どもの心的エネルギーの組成との関係について、精神分析理論からの理解を試みた。乳児のころは当初混沌とし未分化であるが、親の情緒的関与や応答、世話によりまとまり始め、方向づけられる。そして、その親の相互的態度が乳児の心の状態や外界へのイメージの基礎となる。親は育児の際に過去の自分自身の親との関係が賦活され、特にその体験に心理的葛藤が強い場合、その葛藤が子どもの関係形成に影響し、その情緒状態に問題が生じる可能性がある。親子の臨床心理面接ではこの親自身の子ども時代の親子関係について見立てや理解を持つことで、まず、親の子どもへの情緒的関与の困難さを心理力動的に理解し、強い共感的態度を持つことができるであろう。また、面接では、その葛藤が投影されていると思われる親子関係の場面を詳細にきいて鮮明化することで、心理面接的介入と援助をより効果的に行うことができるであろう。

キー・ワード：親子臨床心理面接、親自身の親子関係、子どもの情緒組成

1. はじめに

核家族化で育児を支えてくれる親戚が身近にいない、地域コミュニティとのつながりが薄いといった理由から、親を心理的に支え育児とともに考えるとといった育児相談、あるいは子どもの心理的な問題を改善または解決するための臨床心理面接の必要性は格段に増加しているであろう。しかし、一般的な考えや常識的対応では改善がみられず、問題が長引き、親子双方が辛い思いをせざるを得なくなるケースも多々存在する。臨床心理面接は

相談内容の個別性や相談者の性格、生活状況や個人史を重視し、受理面接で収集した情報へのアセスメントに基づいて行う。つまり、一般論では改善しないような育児問題に対して、臨床心理的見立てや問題の理解に基づいた専門的関与や介入を行う。

本論では、親子への臨床心理面接において、親自身の情緒発達の特徴と子どもの心の組成との関係をとらえていきたい。情緒や情動といった人間の根底にあり、生涯にわたり人との関係を決めていく心的エネルギーの行方を親子関係、特に親自身の生育史との関連させながら、子どもの心の組

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

成や情緒発達の問題を精神分析理論の見地から考えていく。なお、ここでいう情緒発達の問題は、脳神経の異常といった器質の問題からくるものは除くことにする。

2. 親自身の情緒発達の問題

子どもの出生からの未分化な心的エネルギーをうけとめ支え、ところをつくっていくのは親からの養育、情緒的関与や相互のコミュニケーションである。コミュニケーションとは言葉によるものと様々な表情、姿勢、態度、雰囲気といった非言語的なものがある。もちろん乳児早期は言語の理解は困難であるが、動物的感觉や対象の表情を読み取る能力は備わっている。初めて目にする動く生体とはどのようなものか、生死をかけて自分の環境を感じようとする。そして、その心的環境を形成していくのは親である。つまり、親の半生の中で形作られてきた親の言語・非言語的コミュニケーションのパターンやそこで働く心的エネルギーの質は子どもの情動、感情の発達を左右し、乳児の自己の組成を担っていく。そのため、もし、親自身が生育歴的に何らかの情緒的発達の不十分さや心の傷を抱えている場合、そのような親の状態が子どもの情緒状態とその発達や適応の問題につながることは事例として大変多くみられる。親自身が自分の気持ちを表現するのが難しく抑制的であるため、相手の気持ちを感じようとしない、あるいは親が子どもに知的で合理的な説教をし、統制しようとする。親がひどい感情を表現しすぎて不安定、子どもに侵入的であることもある。このような親の情緒的な問題が大きい事例は一般的な育児知識や情報にもとづくアドバイスの指導や援助が限界となる事例でもある。

例えば、面接で子どもの様子をきいていくと、親の子どもへの気持ちの表現の難しさや子どもの気持ちに注目し、感じることの難しさがある。もっとも、面接者である筆者が難しいと感じるだけで、このような難しさは親にとっては普段の関わりである。母親、父親ともどもこれまでの数十年が必然的な生き方であるが、筆者から見ると自分の気持ちを過度に抑制してきていると理解される事例もある。親自身が自分の親から様々な気持ちを聞いて支えてもらったり、関心をむけられたり

といった体験がほとんどないというエピソードが語られることがあり、セラピストである筆者はそれに驚くが、親自身はそのようなことに疑問や葛藤をもったことはないとおっしゃる人もいる。さらに、これまで自分の親子関係を振り返ったことがない人も多くいる。親自身は通学、進学、就職や結婚など、特に大きな問題もなくそのようなライフイベントを生きてきているので、恐らく振り返る必要はなかったのであろう。

では、親となることや育児をすることは、これまでの様々な発達課題やライフイベントを体験してきた個人の生き方とは何が違うのか。キャリアを積み仕事を経験することや、職場や地域で人間関係をもつことと、家庭の育児や子どもの成長に直接関与する行為とは、どのように異なるのであろうか。

3. 社会的体験と親業との違い

社会的関係では、集団の中で大人として自分自身を統制する能力、言語力、知的処理過程を要した仕事を行い、社会ルールに従った判断と行動が求められ、個人的な真の感情を出すことはかなり憚れる。一方、家庭や家族は血縁であり、愛情関係で結ばれている。親はその人格や個人的考え、また気持ちを出し、親としての義務や役割をこなす。食欲など本能的次元の欲求を満たして命を生成維持し、親子ともども人格を育成していく場である。そして、親の個人的感情や考えがその育児や家族のありようを決めていく。一方、乳幼児は社会ルール、時間にお構いなく泣き、本能的な動きで周りを振り回す。本能や情動が中心の乳幼児は、親の知性や理性よりも、親の生来的な身体から発する情動のありようをとらえるであろう。他者を求め愛する力や、無意識的な感覚をもち、周りの対象へと生きるエネルギーをむけ、様々な興味を発現する存在である。発達早期の乳児の衝動を親の嫉や知性や理性による統制下におき、また時間という枠に入れようとすることは、恐らく、至極困難なことであろう。

親は学校や社会組織等で教育を受け経験を積み、多くの知識や技能、規律を身につけてきたであろうが、その世界と生々しい熱をもった人間を扱う育児業とはかなり次元の異なるものとなって

いる。よって育児業をする時に情緒統制の見本となるのは、やはり自分の育てられ方が主要な体験となるであろう。そのため、子どもと愛着関係を作っていく際には、その親自身の親との愛着関係が意識的にも無意識的にも立ち現れてくると考えられている。いわゆるFraiberg et al. (1975) のいう“保育室の幽霊 Ghosts in the nursery”である。誕生直後から親子の間に侵入してきて、姿は見えないもののその関係に強い影響を与えていく内在化された対象である。子どもの出生時から親の乳児へのイメージや関与の仕方は方向づけられているのである。また、Barrows (2003) は、この対象が子どもに投影されていくとして、“親から内省や熟考されていないこの対象 (unassimilated object)” の投影を子どもから取り除くならば、夫婦の関係にその存在が現れると論じている。

4. 乳児の混沌とした内的世界

人間本来の生きるための心的エネルギーはどこからくるのであろうか。身体上は食べ物を消化吸収し、栄養素に分解して、エネルギーとなり体全体を動かしている。そして、その体は無数の皮膚センサーと神経に張り巡らされている。しかし、人間はその神経が大変未熟な状態で生まれ、視力も弱く、歩くことはもちろんであるが、自力で首をもたげ座ることすらできない。神経が未発達で手足もバラバラに動かすことから、その神経の指示系統が不十分な状態であることがわかるであろう。

また、乳児の精神内界の方も、精神分析の諸家がのべているように、初めて目に映る対象は、乳児の内界ではまとまりがなくバラバラで混沌としている。表象も概念もない。しかし、それが周りの世話や関わり、言葉かけによって、変化しとまり、つながっていく。

例えば、乳児の精神内界の理論について、英国の対象関係論を確立した精神分析家である Klein, M. は妄想一分裂態勢、抑うつ態勢という学説を唱えた。これは、本来、乳児の母親への乳房から始まる母親へのイメージはバラバラであり、部分的対象という考えである。そして、発達早期では乳児にとって母親の乳房は良い対象と悪い対象に分裂していて、不快をもたらす悪い対象には

内界で攻撃をし続けている。その後、良い対象と悪い対象が同一のものであることがわかり始めた時、両対象が統合される。そして、母親の全体像が子どもの内界で成立し始めたときに、愛する対象を攻撃し続けていたことに気づき、罪の意識をもち、うつ状態になるという。また、この攻撃した罪の償いのために思いやりが芽生え始めるという考えである (Klein, M., 1946/1985)。

5. 乳幼児への母親（養育者）の関わりと乳幼児の自己の状態

乳児は出生後からの快—不快といった単純な感情をもち、不快な時はぐずがったり、泣いたり、苦痛の表情を浮かべたりする。快の時は、安らかな顔であったり、笑ったり、満ち足りた表情である。音声、表情、体温、排せつ、身体の状態で母親（養育者）は乳児の状態を感じ、考え、不快を取り除くための世話や応答をする。乳児はまだ母親という全体のイメージさえも覚えていない相手から、世話を受けつつ、身に起こるあらゆること、相手の表情、音声やにおい、動き、抱かれた時の身体感覚、母親を囲む外界の状況など、もちうる限りのセンサーを使い、周りの情報を取り込もうとする。母親が笑えば自分も嬉しくなり、母親が怒れば怖さを感じる。乳児は母親の様々な表情や反応、音声、音調、身体の動きを見ていくことで人間にはそのような情緒や動きがあることを体得していく。相互交流の中で、人間の全体性をもち動いている母親を理想化しながらも、取り込んでいく。

そして、母親は情緒的関与と言語的応答によって言葉の話せない乳児の内なる声や状態を推測し、気持ちをくみ取り、世話をしていく。乳児への愛情や共感にもとづく相互作用によって、乳児は人間に一つのまとまったところや言葉があることを感じ理解するようになる。

例えば、Sameroff, A.J. & Emde, R.N. (1989/2003) は、発達初期の養育関係における情緒応答性の重要さを次のように解説している。養育者からの興味、喜び、驚きなどの肯定的な情緒はこの応答性の定番として、子どもの自我の中核をなす情緒の貯蔵所となるという。これは、“人生を楽しむという以上に、拡大する世界に対する興味や

社会性の励ましを情緒の中核の内側から生み出す”。逆にこれが欠如すると、経験の制約やのちの自己愛的人格障害の発達という危険につながるようである。また、不適切で過剰な情緒（特に、敵意、拒絶、虐待）の防御や次の世代で子が親になった時、親役割を果たせないという障害にみられるような、神経症的な葛藤の構造の危険につながると述べている。

また、アメリカの精神分析家であるSullivan, H.S.は、母親（またはその代理）がくつろいだ愛情のこもった態度で乳首を幼児に含ませるか、あるいは冷たいイライラした態度でそうするかによって、前者を良い乳首、後者を悪い乳首と名づけた。そして、この2つのカテゴリーが、一連の感情、態度、原始的なものの見方を発達させ、その2つの相対的比率が、自分を取り巻く周囲の世界をどう見るかに著しい影響を及ぼすという（Chapman, A.H. & Chapman, M.C.M.S., 1980／1994）。

むしろ既に存在している親の存在自体が自己そのものになっていくという考えもある。フランスの精神分析家であるLacan, J.は、乳幼児が鏡を通して自己をみる「鏡像的段階」において、“幼児は鏡の中に理想的な全体性を見出し、小躍りして喜ぶ。それこそ自己のまとまりすらとれない混沌、いわゆる「寸断された身体」の状態から幼児を引き出してくれるものだから”と論考している（浅田, 1981）。自分が自分を知り形成していく以前に、外の視覚イメージの中に自己の身体を見て、自己のまとまりをゆだね、ひいては他者に映る自分に自分をみていかねばならないといった主体を排した心的形成について理論を展開している。つまり、“鏡像というルアーに騙取されて主体は自己とは別のイメージを中心に、生涯身にまとうことになる想像的自我を他者にしか還元できない形で、疎外の線上に受け取ることになる”，そして“母との欲望を介した連続性の中で、自他内外の区別を見失う子供は、母の欲望の複製として自己の欲望を見出し、母の微笑む外部の鏡像に自己の収束点を見て、自己疎外的な像のまわりに自分というものを作り上げていくことになる”という（福原, 2005）。鏡が母親の視線や表情、欲望へと変遷し、そこに自己をとらえ、自己は他者の中に

あるため、この考えには、自分自身で自分を創生しようという考えは一切みられない。

乳児は、外界では親との相互交流で様々なものを取りいれたり、表出したりしながら、母親の目に映る自分に自己のまとまりを託していく。母親が言語や非言語の水準、意識・無意識的な水準で求めたり、期待したり、ほめたり罰したり大変複雑なやり取りの中で、子どもはむしろ生来的な性格よりも、親のもっている子ども像、あるいは人間像、親自身の子どもの部分といった、出生前からの親の心にある人間の雛型に合わせていかざるを得ないのではないだろうか。

6. 衝動を出すことの不安で固くなる子ども

主に母親面接の体験から考えると、母親自身が情緒に乏しい、あるいはうまく気持ちを表現できないといった性格傾向を感じる方が多い。また、“～とってあげてください”、“こういう時は～とってみてください”と指示して、親が上手に関わることがあるかもしれないが、およそそのような関わりを自然にできなかったゆえに、子どもの情緒的発達やその表出のつまずきが出てきたものと思われる。

そのような場合、子ども自身が親に遠慮して、自分の思いをぶつけるといった試行錯誤ができず、自分のエネルギーの激しさを測りかねている。自分の生命エネルギーをぶつけると、相手を傷つけるかもしれない不安、そうすると見捨てられるかもしれない不安、破壊するかもしれない恐怖を子どもは無意識的に抱いていると思われる。それゆえに、自分の内なる衝動への無意識的不安、またそのような衝動エネルギーを外の世界へと道づけてもらうことや、複雑な情緒を国語で名付けてそばに居続けてもらう体験が不十分だったゆえに、不安や深い混乱を抱えている子どもが多い。また、親自身も自分の気持ちを抑え、相手を尊重しすぎ、そのような主張や自分の意思がないかのような生き方をされてきた方もいらっしゃる。

親の雛型があまりにも強すぎる、あるいは情緒を育てていくうえで雛型に歪みがある場合、子どもは情緒的エネルギーや衝動の発露をみいだせずに鬱屈した内界をかかえたままで抑圧的とな

る。あるいは全く内界のエネルギーや衝動を自覚することすらできない。これは、不発弾を内界にかかえているようなもので、潜在的に何らかの恐怖心をもっている。出会った事例では、運動ができず表情に乏しく、独特の緊張感をもっている子どもたちがいるが、このような子どもたちは、身体を固くすることで衝動を内に抱え、それが出ていくことを防いでいるように考えられるのではないであろうか。

7. 事例にみる親子それぞれの情緒的発達と両者の関係

次からはいくつかの事例をあげながら、親自身の親子関係の情報に関連させながら、子どもの問題を考えていく。なお事例は本筋を変えずに個人が特定されないように修正していることをお断りしておく。また、母親の要因だけが子の成長に影響するという考えは極論であり、子どもの発達には父親は直接的・間接的にも影響は多大である(Barrows, 1999)。父親の家庭内の布置や父子関係を扱う態度は心理面接上、大変重要であるが、直接来談した母親に関しては問題についての種々の情報が非言語的にもセラピストが体験し把握可能であるので、本稿では主に母親—子ども関係を中心に考えていく。

1) 息子との関わりが難しい母親

母親自身が男児の激しいエネルギーを嫌悪して距離をおく、受け止めない。あるいは、そのようなエネルギーを強く押さえつける関わりをしてきた事例を数例体験したことがある。以下、簡単にその特徴を述べ、検討していきたい。

【事例1】 学童期の男児は数年間の不登校のため親子で来談した。その母親は、周りからも指摘される位に厳しく育てたと話した。母親自身の生育歴を簡単にきくと、母親の実父は軽度のアルコール依存症であり、酔って大声をあげたりするのはとても嫌だったと語った。特にその父との関係を面接で積極的に取り上げはしなかったが、面接者個人内としては母親の子どもへの態度の意味づけをすることができた。

【事例2】 子どもの成績が低いことを主訴に来談した父親の話によると、母親は父親がわかるくらい男児に対して、幼児期より距離をおいていたという。男児は幼児期に母親の様子を窺うように周りにいたが、なかなか近づけない様子だったという。子どもは学校で友人との遊びや交流はできていたが、自宅で親と話すことはほとんどなく学校のプリントも渡さずに、親が学校に来ることを嫌がっていた。母親によると、その実父は気性の激しい人で、家ではよく怒っていて、母親はそのような実父を大変嫌っていた。

男児の幼さゆえの様々な激しい情緒や身体の動きの中に、大人であっても大変幼い情緒を家でまき散らす実父への不安や怖さ、あるいは嫌悪感といった母親の過去体験が賦活されることは想定できるのではないであろうか。それは母親にももちろん自覚しうることでなく、男児には母親なりに必死に食事や身体的世話はなされてきている。しかし、男児の情緒や気持ちを受け止める、関わる、応答するといった精神内界を構成していくための母親の情緒的関与に関しては、かなりの困難さがともなっていたものと思われる。母親にはそれが意図的でも意識的でもなく、とても自然なものであったであろう。しかし、子どもの情緒発達や母子間の信頼感についてはなんらかの支障をきたしていると思われた。しかし、これらの事例では、母親の実父への葛藤を意識させるような方向や解釈などを筆者は一切行わなかった。事例によっては主訴の解決が1年と早く、母親自身の問題を扱う必要がなかった帰結もある。

このように、内界に沈潜している様々な母親自身の苦痛や傷つきに触れずとも子どもの問題が解決する事例は多くみられるであろう。弘中(2006)も子どもの問題に焦点化しても、親面接の過程で“親の問題は相当濃厚に取り扱われるものである”と述べている。弘中は詳細を論じていないが、親の問題を言語的に指摘しなくとも、親の育児の苦悩と伴にいる面接者の情緒的支えや理解が、親の昔の傷つきの回復を援助しているのかもしれない。

2) 子どもの問題を通して母親の潜在的問題に触れた事例

次は、面接者が意図的に母親の生育歴に関与した事例をあげてみる。“親が自分の問題ではなく、子どもの問題を入場券として来談してくるものの運命的な状況”（弘中，2006）という考えもあり，その子どもの問題を媒介して，母親は情緒的には幼い自分の部分を支えてもらう必要が何かしらあるのではないか。それを自分の中で認識しているかどうかは不明であるが，生きていく上で何らかの引っ掛かりがある痛みの部分（固着）への心理的援助をうけ発達させるために，子どもは親を面接室につれてくるとも考えられる。

【事例3】第1子の心身症の問題で来談した母親は，その問題が落ち着いた1年2か月後に今度は，自分のことがうまく話せない娘のことで相談したいと言いだし，面談を続けていた。その女兒は母の意見を優先し母親自身と似ていると母親は理解していた。この母親との面接関係は1年半経過しても，筆者は母親の受身的な態度が気になり，面接者である私はベールの外に置かれている感じがして，思い切って母親の生育史を受理面接の時よりもさらに詳しく聞いた。すると，姉が激しい気性でそちらに実母は手がかかり，母親は親を困らせたくなかったので泣きたい時でも我慢していた過去が語られ，その内容を治療的に扱った。それは一度だけであったし，その後，母親からも話されることはなかった。しかし，その面接の次の回で，母親は外見が若い娘のようになり，甘えた感じの表情を面接者に見せるようになった。同時期に子どもも「戦いとおねしょの夢」を話し，母親は女兒の気持ちや要望を家族に伝え，気持ちを受け止めようとするようになった。その後，女兒は積極的になり友人関係も豊かになり変化していった。その後，面接者は母親自身の事に方向づけたが，母親は自分の対人態度について「普通」といい考える気持ちはなかったので終結となった（浴野，2012）。

この事例は母親が娘の中に自分の嫌悪している性格を認め，その娘を媒介にして心理療法をうけ

ていたように理解される。娘のよりよい適応を望む母親とともに，自分の気持ちを抑えざるを得なかった子ども時代の過去の娘（自分）とそれを象徴する実の娘，そして実の娘は他の面接者に会い，過去の娘と現在の母親としてのクライアントは親面接者に会っている。過去の娘（自分とその実母との関係）と現在の母親（自分），そして自分が産出した実の娘，このような二世代が錯綜する中で，面接者は現実の親役割や子どもたちとの関わりを援助しながらも，母親の過去の娘として置き去りにされていた傷つきや悲しさの部分にも情緒的に配慮した。一度だけではあったが，直接扱ったことはその過去の傷つきを少しは癒したのではないだろうか。母親の傷つきやしんどさを，少なくとも第二者および第三者である面接者一人が注目し感じる行為をとったことが，心理的な癒しにつながったのではないだろうか。そして，それが子どもの良好な変化へと連動していったのではないだろうか。Altman, A. et al (2002) は，親が子どもに新しい方法で共感するために，心理療法の開始時に，両親自身の親子関係に目を向けることを親に示唆すべきと述べている。また，親は親にとって人生上最初の重要な人と乳児を同一視するために，それにより子どもを正確にとらえ個人として共感していくための親の能力が害されるという。そして，親がそのような否定的な同一視を親ガイダンスや心理療法によってワークスルーする時に，子どものセラピーは成功するとのべている。

直接，面接者が母親に生育歴への解釈を述べ，子どもの問題と関連付けた心理力動的理解を伝えるかどうかとは別に，ここでは面接者が母親自身の生育歴上の情緒状態や親自身の親子関係に着眼することが重要な理由を次に考えていきたい。例えば，事例1，2では母親の男児への関わりの難しさの背景にある母親自身の父親体験に着眼したことは，面接の進行に大きく関与したであろう。

第一の理由は，面接者の心的構えや理解の点である。子どもを無視する，うまく受け止められないといった態度は，一般的な良い母親論からいうと，世間的には否定されるものである。母親は育児への自信喪失，失敗感，世間体への恥や，周囲に迷惑をかけているという罪悪感など，種々の苦悩をもっている。母親は，子どもが他の子どもと

同じようにできないことにもふがいなさや情けなさを感じているかもしれない。面接者の基本的態度として、このような孤立し苦悩している母親を受け入れて、気持ちをききサポートしていく。それは親面接の大前提であろう。しかし、面接者の逆転移として面接者が母親と情緒的につながれない感じを抱き、変化をしないことへの苛立ちを感じることもある。また、子どもの気持ちを受け止め個性を表現させて育てることが難しかった育児への疑問も面接者は持つのではない。しかし、母親の生育史を聴くことで、そのような関わりをせざるを得なかった必然性について、面接者は見立てや扱う方向性をもちうるであろう。また、母親の子ども時代の家環境の大変さや親自身の自他の情緒や感情の扱い方の困難さを理解し、そこからくるであろう母親の子どもの情緒への脅威や嫌悪感を、面接者が理解し共感できるであろう。そして、このような理解を経ることで、母親の子への難しい態度を許容でき、そのような面接者の緩やかな態度は、母親の苦しさや傷つきを強く引き受けることができるのではないだろうか。そのような面接者の精神的構えや理解の状態は、母親の気持ちや状態に対しても影響しうるであろう。

第二の理由は、親の生育を背景にした子どもの問題への仮説をもつことで親面接の内容の中で、母親の苦手とする場面や情緒的なやりとりを仮説に照合しながら鮮明化し、面接での聞き方を常にその問題に収斂させていく態度が可能となるであろう。これまでの関わり方の中で、うまくいった面とそうではない面があったと思われるが、後者の方をより良い関わり方、応答、子どもへの理解の仕方などを考えてもらうことになる。面接者の指示やアドバイスだけで変化が可能な親ももちろん存在しうるが、そのような言葉の指示はとてもハードルが高い親も多くいる。そこで、子どもとの関われなさをより探究していくべきであろう。そこには母親の陰の部分が見え隠れする。自身の親子関係のことへと連想する母親もいるが、そこまで連想がでず、現実の生活や子どもの様子を話す人も多くいる。子どもの問題で来談しているわけなので、それが当然であるともいえる。母親が子どもの気持ちを受け取ることに難しさや拒否感を持っている時に、その態度に注目することで、

親子相互のやりとりを修正し、子どもの治療により直接的に働きかけることができるであろう。

しかし、あまりにも早く親自身の過去の親子との問題を扱うと、抵抗が強くなり親面接が中断する危険性も多くある。よって、母親自身の生育史を深く検討していく際は、面接上の信頼関係がよほど確立している、あるいは子どもの問題が解決しつつあり、そのようなテーマを扱う余裕が親に持てるようになるといった局面が望ましいであろう。弘中（2006）も“子どもの問題が峠を越えたときに、親自身の問題を扱う可能性・必然性を模索、検討する”というのが無理のないやり方と述べている。

親面接では、多くは子どものことで話題が集中し、親のかかわり方を支持したり、ときには子どもの気持ちを理解したり想像したりすることを親に依頼する。様々な場面を詳細に聞きながら、子どもの動きや状態、その発言を話してもらい、親自身の考えや気持ちも話してもらう。親の様々な思いや気持ちを表現してもらうことも、子どもとの対話において、情緒的関与や意思疎通を豊かにし、新しい関わりの道をつくっていくことになる。

8. 最後に

親子臨床心理面接では子どもの問題を扱うことが中心テーマではあるが、そこには親の過去の歴史が潜在的には関与しているであろう。親自身の知的な統制がききにくい親自身の傷ついた情緒的交流の問題が影を落としているものと思われる。よって、慎重さが求められるものの、親自身の親との体験に注目し、受理面接の段階でそのような親自身の親子関係をきいていくことも必要であろう。そして、心理力動的な仮説を見立てることにより、心理面接で話される内容の中からその仮説に関係するエピソードをとりあげ扱うことができ、親の生育歴を背景とした子どもの心理面接は効果を上げていくのではないかとと思われる。

引用文献

- Altman,N., Briggs, R., Frankel,J., Gensler,D. and Pantone,P. 2002 “Including Prents in the Psychotherapy”. Relational Child Psychotherapy. 287-310. NewYork: Other press

- 浅田 彰 1981「ラカン 構造主義のリミットとしての」現代思想 総特集 ラカン, 青土社, 90-105.
- Barrows, P. 1999 Fathers in parent-infant psychotherapy. *Infant mental health journal*, 20(3),Pp.333-345.
- Barrows, P. 2003 Change in parent-infant psychotherapy. *Journal of child psychotherapy*, 29(3),Pp.283-300.
- Chapman,A.H. & Chapman,M.C.M.S 1980 Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness. Brunner/Mazel,INC. (A.チャップマン・M.チャップマン 1994 監修 山中康裕 訳 武野俊弥・皆藤 章 サリヴァン入門 岩崎学術出版社)
- 浴野雅子 2012 母子並行面接で親自身の過去を扱う意義 日本心理臨床学会第31回大会論文集, 148
- Fraiberg,S., Adelson,E. and Shapiro, V. 1975 'Ghosts in the nurse':a psychoanalytic approach to the problems of impaired infant-mother relationships'. In Fraiberg,S.(ed) *Clinical Studies in Infant Mental Health*. London:Tavistock 1980.
- 福原泰平 2005 「鏡像段階論」ラカン 講談社 54-82.
- 弘中正美 2006 親面接をめぐる諸問題 明治大学心理社会学研究 1, 64-73.
- Klein,M. 1946 Notes on some schizoid mechanisms. The Writings of Melanie Klein Vol.3, Envy and gratitude and other works, The Hogarth Press Ltd., London (狩野力八郎・渡辺久子・相田信男(訳) 1985 分裂的機制についての覚書. 小此木啓吾・岩崎徹也 責任編訳 メラニー・クライン著作集Ⅳ妄想的・分裂的世界, 誠信書房, 3)
- Sameroff, A.J. & Emde,R.N 1989 Relationship disturbances in early childhood: a developmental approach. Basic Books, Inc. (A.J.ザメロフ・R.N.エムディ 2003 監修 小此木啓吾 第2章 乳幼児の関係性の経験：発達的にみた情緒の側面 早期関係性障害 岩崎学術出版社)